

2024. 11. 27

都立戸山&お茶高理系女子育成連携プロジェクト「女性研修者にインタビューしてみよう」は、両校の生徒が組んで女性研究者にインタビューし、そこで得たものをまとめ、全校生徒に向けて発信するプロジェクトです。ここでは1年生3名が2024年7月11日、お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系准教授の長谷川直子先生にインタビューした内容をご紹介します。

長谷川直子先生は、女性研究者の少ない地理学分野で第一人者として活躍されている研究者です。私たち1年生は5月に諏訪合宿に行き、近年諏訪湖の「御神渡し」という現象が発生しづらくなっていることを知りましたが、「御神渡し」も先生の研究分野の一つです。また、お茶の水女子大学で准教授を務める傍ら、日本地球惑星科学連合の理事も兼任されています。

今回のインタビューの中から質問を一部抜粋して、ご紹介します。

○学生時代

Q.フランスに留学していたことがあるとお聞きしましたが留学中の経験などを教えていただけますか。

フランスに留学したことで日本との文化や生活習慣の大きな違いを目の当たりにし、それまでの考え方や常識が通じなかったことが特に印象に残っています。新しい視点や価値観に触れ、自分の世界を広げられたことがとても良い体験になりました。

○女性研究者として

Q.地理学を選択したきっかけは何ですか。

高校3年生の受験勉強で一番地理が面白いと感じ、地理学を学びたいと思うようになりました。それがきっかけで大学では地理を専攻しました。

Q.女性研究者であることは意識されてきましたか。

一般的に研究者になるためには、大学で学部を終えた後、修士課程と博士課程を経て研究機関などに就職します。私はお茶の水女子大学出身であったため、在学中は研究室に女性がいることが当たり前でした。卒業後、お茶大の外に出てみて、女性の研究者の数が男性と比べ圧倒的に少ないことには驚きました。研究者における男女比は分野によって異なりますが、その中でも地理・地学の分野は特に女性の割合が低く、15%ほどです。特に学会に行くと女性の数が急激に減り、改めて自分が少数であることを実感します。

Q.女性研究者として大変なこと、良かったことはありますか。

普段は、自分が女性であること、また周りに男性が多いことなどは、気にしていませんが、学会などで女性の数が少ないのを見ると「なぜこうなったのだろう」と感じます。また、私自身はあまり女性研究者としての大変さを感じてきませんでしたが、苦勞を聞いたことはあります。

とはいえ、現在は、大学も企業も積極的に女性研究者を採用するなど変わってきており、女性研究者であることが有利に働く面がたくさん見られるようになりました。このような状況の中で、私自身も学会等の重要なポジションに就く女性を増やしたいという思いから、日本地球惑星科学連合の理事を引き受けています。

Q.研究者としての生活を教えてください。

現在は10人ほどの共同研究のリーダーを務めています。大学の管理業務なども担う年齢になっており、4～5年間に比べると、自分の研究に費やす時間は限られるようになりました。限られた時間の中でベストを尽くすようにしています。

Q.研究に行き詰まった時の対処法はありますか。

研究に行き詰まった時には同じ分野の研究者や共同研究の仲間と議論を重ねるようにしています。また、年に数回の学会発表の準備などをしていると、詰まるというより、エンドレスに疑問や問いが出てきて、目の前の疑問と向き合うことで、研究が進んでいきます。

○研究について

Q.先生が研究されている「御神渡し」の研究についてお聞きたいです。

御神渡りが起こらない年は明けの海と呼ばれています。御神渡しはだいたい 1400 年頃から記録が残っているのですが、以前はほとんど毎年起こっていたのに対し 1980 年頃から明けの海である年が増加している傾向にあります。これにはレジームシフトと呼ばれる冬の気温が急激に世界全体で上昇する現象が関係していると私は考えます。このレジームシフトは御神渡し以外にも桜の開花日など様々なことに影響しています。異常気象や地球温暖化が問題となっている現代では御神渡りの現象にも色々な要因が考えられます。

ー感想ー

- ・身近に研究者がいないということもあり、研究者という仕事に“大変そう”や女性よりも男性の方が多く、“研究しにくそう”といったマイナスなイメージを持っていた。しかし、このインタビューを通して、女性研究者の人数は少ないものの研究しづらさや居心地の悪さはあまりなく、自分が学びたいことを追究し続けられるという良さがあることを知った。研究者という仕事が自分の将来の職業選択の一つになった。
- ・わたしが地理学について興味を持ったのは諏訪湖の合宿でした。今回、諏訪湖がだんだん縮小化されることに対する懸念点などをより詳しくまた研究についても聞くことができてうれしかったです。
- ・女性学者の割合が、学会の中では 300 人しかいないと言う事実には大変驚きました。理数系に限らず、学者として研究している女性が少ないということが問題だと思いました。研究者として生きていくためには、女性であることを、気にしないということも大切だと思いました。

長谷川先生、お忙しい中ありがとうございました。

